特別支援教育（知的障害）（案）

中山美代・髙阪英徳・城　一樹・梶山雅司
西　勉・藤井朋子・檜和田祐介・小田原 舞

Ⅰ　研究の経緯

１　中学校卒業時のめざす生徒像

○　自分の役割を自ら果たそうとする生徒

２　授業仮説

○自己肯定感を高める授業づくりを継続的に行うことによって，児童生徒自身の「やりたい」「役に立ちたい」気持ちをひきだし，将来，それぞれの生活の場で自ら責任をもって役割を果たそうとする姿につながっていくであろう。

３　研究の経過

本学級では，これまでの研究で，自己肯定感を，自尊感情を育む際に肯定的に働く感情ととらえ，授業づくりを行ってきた。自尊感情には基本的自尊感情と社会的自尊感情があるとし，日々の授業のなかで，教科等の特性を生かしながら繰り返し実践していった。この実践の過程において，児童生徒の自発的・意欲的な言動が多く見られ，自信を持って自らやってみたい，誰かのために役に立ちたい，という気持ちや学習活動への意欲が自己肯定感の高まった具体的な姿として見られた。この成果に至るまでの授業実践を整理していくと，次の５つのポイントが自己肯定感を高めるために有効な視点であることが明らかになった。

（１）児童生徒が意欲・興味・関心のある教材（題材）を設定すること。
（２）うまくいかないことをやり遂げる現実度を上げること。
（３）活動量・活動の主導権を児童生徒の実態を考慮して適切に配置すること。
（４）ほめる・認める場面を設定すること。
（５）集団の力を活用すること。

そこで，今年度も継続してこれら５つのポイントを取り入れた授業実践を積み重ねつつ，自己肯定感が高まっている１つの具体的な姿を見ることができる場面として，児童生徒の「やりたい」，「役に立ちたい」という意欲的な活動に焦点を当て，「やりたい」，「役に立ちたい」意欲を引き出す授業モデルの開発に重点を置いて取り組んでいく。

４　基本的な考え方

近年，学校教育においては，複雑化，多様化していく社会の中で，自ら様々な課題の解決を図り，主体的に周囲と関わっていくための力を育てていくことが求められるようになっている。そうした力の基礎となっているのが，周囲の他者との関係の中で，自分が価値ある存在であることや自分の存在を大切に思う気持ちである自己肯定感である。学校教育の中で，児童生徒の自己肯定感を高めていくことが求められている。

特別支援教育においても，障害のある児童生徒の自己肯定感を高めることにつながる要素の１つとして活動に対する児童生徒の意欲を高める指導や支援の手だての検討が求められている。特別支援学級で学ぶ児童生徒の状況を見ると，これまで経験のないことや困難なことに出会った時，不安や自信のなさから，課題に対して消極的な行動になることが見られている。その結果，自分が何をどこまでできる力を持っているのか，課題に取り組む中でどう解決を図ればよいのか自信が持てないまま過ごし持っている力を十分発揮する経験を積まないまま学校生活を送っていることも見られる。

そこで，今年度は児童生徒が「やりたい」「役に立ちたい」という意欲をもってより主体的に活動に取り組むことができる授業づくりに焦点を当てることとした。意欲的に活動に取り組んだ結果，児童生徒は活動をやりきる満足感や達成感を味わうことができる。この経験を積み重ねていくことを通して児童生徒は自分自身に対する自信を深め，新しい課題などにもより積極的に取り組むことができるようになると考える。

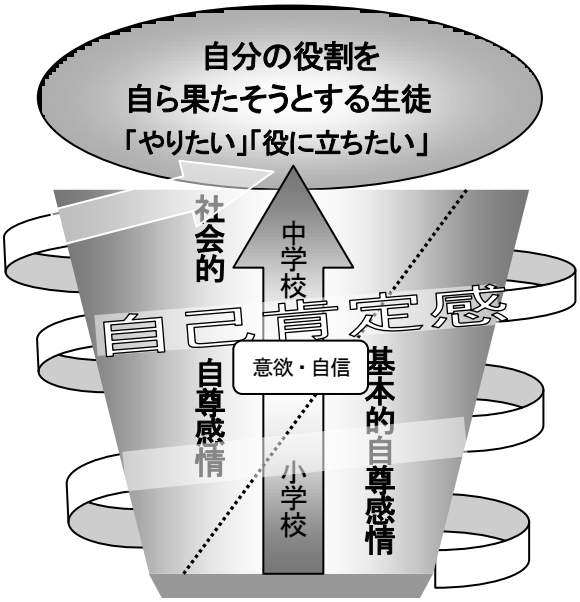
小学校から中学校の９年間は，様々な問題を乗り越えて生きていくために必要な知識や技能等を基礎的な段階から定着・活用する段階へと継続して積み重ねていく時期であり，自己肯定感についても継続的に形成していく重要な期間だと考える。

特別支援学級で学ぶなかで，９年間を通して様々な力を積み上げていくことによって自己肯定感を高める１つの要素である意欲をひきだし，将来の社会生活の場で自分の役割を自ら果たそうとする児童生徒を育てていきたいと考えた。児童生徒のこれまで経験してきた学校生活におけるそれぞれの実態や発達段階などを考慮し，活動や行動上の目標を一人一人に具体的に提示したり，自分で目標を立てさせたりすることを通して，目標達成による成功体験や達成感を得る機会を多く経験できるようにしていく。また，意図的にグループでの学習を取り入れたり，他者との協調的な学習活動を行ったりすることで，集団の中で周囲との関わりを通した経験が積み上がるようにしていく。個人の経験だけでなく，集団の中で周囲との関わりを通した経験が積み上がっていき学びのつながりを実現することで自己肯定感を高めることをめざしたい。

本研究においては，自己肯定感を「自分の評価を行う際に，自分のよさを肯定的に認める感情」と定義する[1)]。そして，自己肯定感を支える二つの側面として，「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」を考えている。「基本的自尊感情」は，他者との比較や優劣といったものからではなく絶対的根源的な思いとして，自分はこのままでよいと思える感情である。また，「社会的自尊感情」は他者との比較や優劣に影響される感情で，プラスの評価をうけたり勝負に勝ったりすることで高まっていくものである[2)]。

研究を進めるにあたっては，小学校と中学校を通じ，児童生徒の実態に合わせて，この「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」をバランスよく指導し，自己肯定感を高める授業づくりを継続して行う。これまでの研究で明らかになった自己肯定感の高まった具体的な姿として確かな自信のもとに「やってみたい」「役に立ちたい」という気持ちを引き出すことを目指す。今年度はさらに，これまでの研究で明らかとなった 児童生徒の姿に基づき，活動の段階に応じた 5 つのステージで児童生徒の目指す姿を捉え（表 1），9 年間の学びのつながりのゴールとして本研究の目指す生徒像に迫りたい。

小学校段階は，主に「基本的自尊感情」を高めていくために，基本的な学習をしたり生活スキルを習得したりしていく時期であり，目標と手段が明確な活動や身近なものから社会的なものへと発展していくことをねらった活動を行っていく中で児童生徒の意欲をひきだしていく。低学年では興味や関心を中心にした様々な活動を経験して活動自体に対する意欲を育てるようにし，中学年ではこれまでの学習をもとに内容を発展させたり自分でやってみようとする意欲を育てたりする指導や支援をしていく。さらに，高学年ではこれまでの学習をいかしながら自分で考え，自ら取り組もうとする力や他者からの評価を励みに意欲的に学習する力を育てることを授業づく



【研究仮説の構造図】

りにおいて大切にしていきたい。

中学校段階では，自分には良いところがあるという思いをもとに，役に立つ存在であるという思いが持てる経験を積むことで，主に「社会的自尊感情」~~の~~を高めていきながら，具体的な生活の場で臨機応変に対応していく力を育てていく。例えば，これまで，キャリア教育の一環として大学の協力を得て大学での清掃等の実習を展開してきたが，今年度は更に中学校卒業後の職業生活を含む将来の社会生活をイメージできるよう指導内容およびその指導方法を工夫し，カリキュラムの研究開発を行っていく。

このように，小学校と中学校の９年間を通して，「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」を育む授業づくりを進めることで自己肯定感を高める授業づくりを進め，児童生徒自身の「やりたい」「役に立ちたい」気持ちをひきだすことで，目指す生徒像の具現化を図っていく。その際，昨年度まで研究のまとめを受けて「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」のバランスを小学校段階，中学校段階で，児童生徒の実態や指導内容に応じてそのウェートを変えながら進めていくものとする。

また，授業場面だけでなく学校生活場面全般での児童生徒の言動の変容を捉え，その記録を検討することや指導者間の情報交換を行うことで，授業で学習した内容が生活に広がっていることを確かめながら仮説の検証を行い，特別支援教育における授業モデルの開発を目指す。

表１　活動の段階と目標行動

	活動の段階	目標行動（目指す児童生徒像）
小学校	Stage１	様々な活動を経験する中で，好きな活動や楽しい活動を見つけることができる児童
	Stage２	これまでの学習をもとにやりたいことを選んだり考えたりして楽しく活動し，やりきることができる児童
	Stage３	活動の結果を他者が喜んだり感謝されたりすることを励みにしながら，主体的に活動に取り組むことができる児童
中学校	Stage４	集団の中で協力して課題に取り組み遂行しようとする生徒
	Stage５	自分の役割を，責任を持って果たそうとする生徒

Ⅱ　本年度の研究計画

１　目的

これまでの成果と課題をふまえ，小学校および中学校の児童生徒の実態に応じた授業づくりを研究仮説の構造図・発達段階と目標行動をもとに進めていきながら，めざす生徒像の具現化を図る。

２　方法

つぎの点に留意しながら授業づくりをおこなっていく。

（1）　児童生徒の実態に合わせて成果となる５つのポイントを意識した授業づくり

成果としてあげられた５つのポイントは平素の授業づくりにおいても重要であるが，小学校，中学校の児童生徒の実態から「やりたい」「役に立ちたい」という意欲面を重点的に取り組むべき点として授業づくりを行っていく。

（2）　ゴールイメージを明らかにするとともに，どこで評価するのかを児童生徒へもわかりやすくした授業づくり

個々の児童生徒に対してどのような力をつけていくのかを明確にしながら，その時間におけるゴールイメージを児童生徒がもつことができるようにするとともに，それが評価につながるようにする。児童生徒が思う存分活動に取り組み「やり遂げる」経験を大切にする。そのために児童生

徒にとって課題に取り組む必然性があるような単元構成を行うことで課題に対してより意欲的に取り組むことができるようにする。活動の中で児童生徒が「がんばった」「できた」「わかった」など実感した場面で個々の児童生徒の気持ちに共感的な評価を必要に応じて行っていく。

（３）　「やりたい」「役に立ちたい」という意欲が高まった姿をどのように客観的に見取っていくか，その方法の模索，検討。

授業における取り組みを行っていくなかで，実態としての評価や成果としての評価をどのように行っていくかを検討する。児童生徒の実態に応じて自己評価や他者評価などもとりいれていく。

（４）社会的・職業的自立を目指したカリキュラムの開発

児童生徒が，自らの将来像をイメージしていけるような単元構成および指導・支援の方法を工夫し，授業モデルを開発していく。各単元による効果を測定し，カリキュラム作成を行う。

これらの授業づくりに関する取り組みは大学とも連携しながら，理論研究および実際的指導場面の方策，カリキュラム開発などを検討していく。

【参考文献】

１）平成２１年度　東京都教職員研修センター紀要等１０号　「自尊感情や自己肯定感に関する研究　第２年次」

２）近藤卓　『自尊感情と共有体験の心理学　理論・測定・実践』　金子書房　2010.

３）明橋大二『子育てハッピーアドバイス　ほめ方・叱り方１・２』　１万年堂出版　2010.2011.

４）広島大学『学部・附属学校共同研究紀要 2011　第 40 号』広島大学学部・附属共同研究機構　2011.